

フィールドワーク科研最終報告 2014年2月13日

農業・農村地理学におけるフィールドワークを重視した研究の方法

—持続的農村・農業の維持形態・農村空間の商品化に関する研究を例として—

筑波大学名誉教授
田林 明

1. はじめに

地理学における研究方法は様々であるが、なかでも現地において景観観察をしたり、聞き取りやアンケート調査によって情報を集め、さらに記録や史資料、地図や統計を入手するといったフィールドワークに基づいて研究を進めることは重要であり、特に農業・農村地理学ではその傾向が強い。

フィールドワークを重視する研究の手順と方法を、報告者が取り組んできた「持続的農村」と「農業の維持形態」、そして「農村空間の商品化」という3つの課題を取り上げて説明する。フィールドワークそのものの細かい手順よりも、比較的長い期間においてフィールドワークを重視した研究をいかに継続し、発展させていったかという全体の過程を強調する。

発表の手順

1. はじめに
2. 持続的農村に関する研究－富山県入善町の稲作農村を事例として－
3. 農業の維持形態に関する研究－岩手県胆沢扇状地を事例として－
4. 農村空間の商品化に関する研究－栃木県那須地域を事例として－
5. フィールドワークを重視した農業・農村地理学研究の手順と方法

2. 持続的農村に関する研究(1)

— 富山県入善町の稲作農村を事例として —

- 1986年に高橋伸夫を代表者とする科学研究費「わが国におけるコミュニケーション空間に関する地理学的研究」の分担者となった。
- 黒部川扇状地の公民館について、入善町木根地区を事例に調査した。集落の自治公民館と旧村の地区公民館、町の中央公民館を活用した活発なコミュニケーションとコミュニティ活動が行われていた。
- 事例調査を続けるとともに、持続的農村には活発なコミュニティが必要であるとの認識に至り、環境と経済と社会・文化(コミュニティ)という持続的農村の3つの要素のうち、コミュニティを重視して研究を進めた。

2. 持続的農村に関する研究(2)

—富山県入善町の稲作農村を事例として—

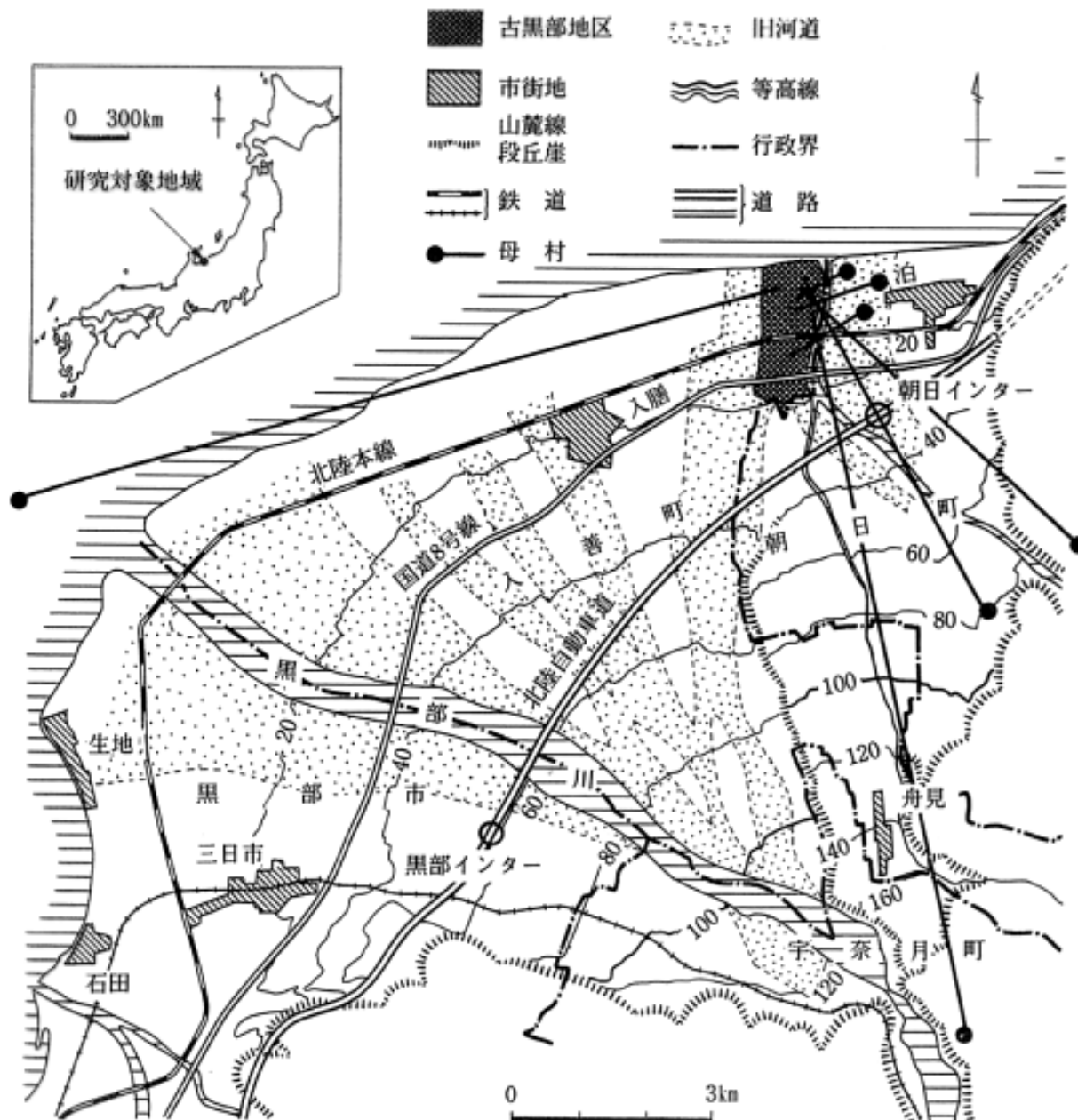
- 1992年12月に黒部川扇状地(地域社会)研究所の共同調査に動員されたのが、入善町古黒部地区を調査するきっかけとなった。非常に活発なコミュニティ活動が行われていたので、翌年本調査をやった。
- 1993年夏の本調査では、文献・古地図・史資料の収集、土地利用・景観の観察、就業構造と生活組織、集落の歴史、本家・分家関係などについて聞き取りをし、その結果を「人文地理学研究」の論文とした。
- 1994年から1995年にかけて、隣接する入善町春日地区や浦山新地区で、同様の調査を行い比較した。また、古黒部地区の総合計画についても調査した。

2. 持続的農村



入善町古黒部地区の多目的利用集会場

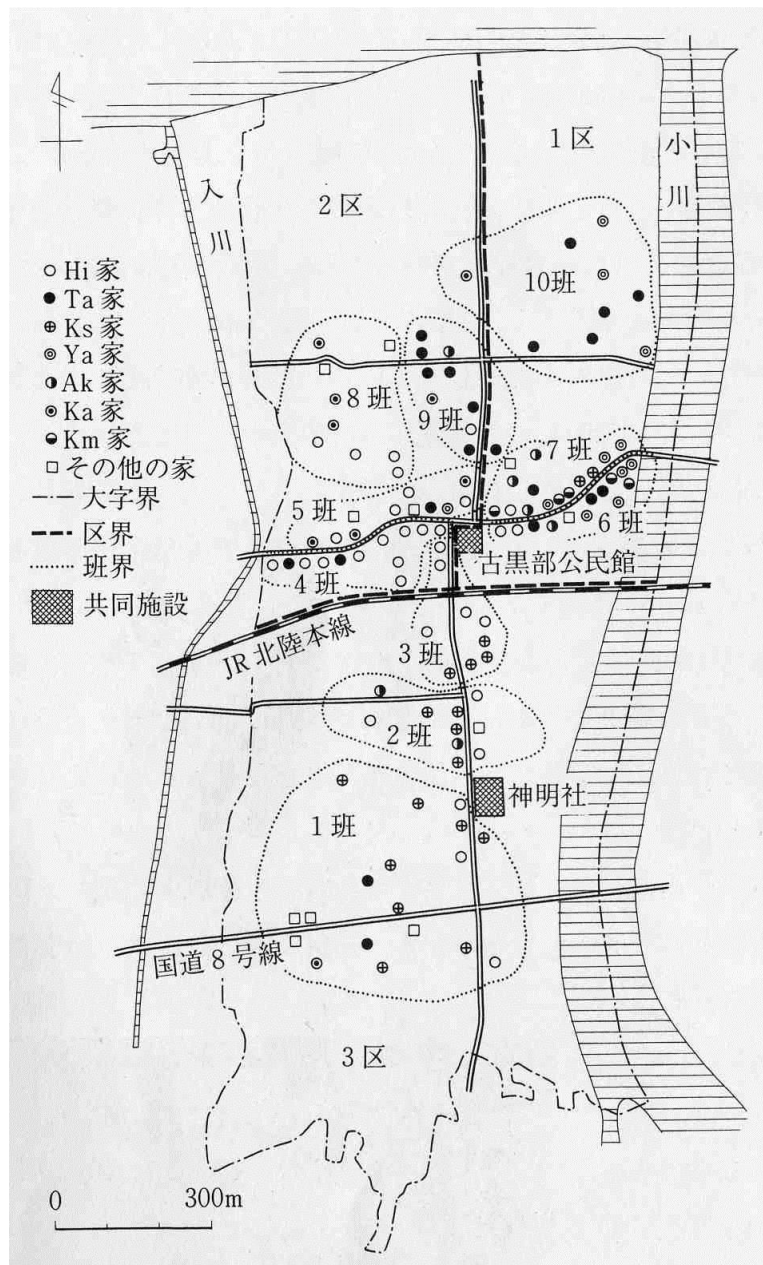
2. 持続的農村



黒部川扇状地の旧河川道と入善町黒部地区の位置

(国土地理院発行5万分の1地形図, 不快三郎(1966), 広川幸晴(1975)により作成)

2. 持続的農村



富山県入善町古黒部地区の区と班(1993年8月)

(聞き取りにより作成)

2. 持続的農村

入善町の古黒部地区と春日地区における社会組織と余暇組織(1995年5月)

	古黒部地区	春日地区
社会組織	体育協会 婦人会 (40～60歳の既婚女性) 児童クラブ (小学生とその父母) 青年団 (30歳以下の独身男性) 若鮎会 (40歳未満の既婚女性) 古青会 (30～42歳の男性) 黒碗会 (43～60歳の男性) 福寿会 (60歳以上の男女) 祭愛好会 (有志)	体育協会 婦人会 (30～60既婚女性) 児童クラブ (小学生とその父母) 八起会 (20～45歳男性有志) 福寿会 (60歳以上の男女)
余暇組織	吟詠会 (詩吟) 華の会 (大正琴) 健康体操の会 ビーチバレーボール (婦人会系) ビーチバレーボール (若鮎会系) 卓球愛好会 習字教室 お茶の会	俳句の会 千鳥会 (大正琴)

2. 持続的農村

入善町古黒部
地区と周辺の農
地(1999年8
月)



2. 持続的農村

入善町古黒部地区における総合計画の基本目標

I. イキイキ活力のむら

- 1) 農業生産基盤（圃場・農業用水、排水路、農業施設）と農村生活基盤（集落農道、集落排水）の一体整備
- 2) 新営農システムの確立

II. 住みよいやすらぎのむら

- 1) 道路交通体系の整備
- 2) 自然緑地、公園、水辺環境の創出
- 3) 環境衛生美化
- 4) 防災体制の確立

III. 親しみとふれあいのむら

- 1) 芸術文化の振興
- 2) 文化遺産の保存と継承
- 3) コミュニティー活動の充実
- 4) レクリエーション環境の整備

IV. 笑顔と健康のむら

- 1) 老人福祉対策の充実
- 2) スポーツの振興

2. 持続的農村

持続的農村研究のさらなる展開

- 科学研究費補助金基盤研究基盤研究(C)「持続的農村システムの形成とその地域的条件」と「持続的農村システム形成における女性の役割」を得て研究を継続・発展させた。
- 茨城県東村(1994)、カナダ・南オンタリオ(1995)、北海道日高地方(1997)、山梨県御坂町(2000)、茨城県守谷市(2000)などで調査をした。
- 1995年8月に筑波大学で開催されたIGU持続的農村システム研究委員会のシンポジウムの世話をし、それ以来各国で開催されたシンポジウムに参加した(1995～2004年)。
- 科学研究費補助金研究成果公開促進費を得て単行本にまとめた。

2. 持続的農村

持続的農村システムの 地域的条件

田林 明・菊地俊夫 著

3. 農業の維持形態に関する研究(1)

—岩手県胆沢扇状地の稲作農村を事例として—

- 持続的農村研究を進めていくなかで、農村の基盤となる農業にいかに活力をとりもどせるか、を調べる必要があることを改めて認識した。
- もっとも農業の維持・発展は、1961年の農業基本法以来の基本的課題で、この方向で従来から茨城県内や黒部川扇状地、日本の他の地域、カナダなどで研究を進めていた。
- 金田章裕を代表者とする科学研究費補助金地域連携推進研究費「散村・小都市群地域の構造と動態に関する比較・統合研究」の分担者として胆沢扇状地を調査した。

3. 農業の維持形態に関する研究(2)

—岩手県胆沢扇状地の稲作農村を事例として—

- 比較的短い期間に効率的に調査の成果をあげるために、大学院生2人との共同研究とした。
- 文献の検討と2回の予備調査を行った後に、対象地域の214の農業集落を多変量解析によって3つに分類し、その中から事例集落を選び現地調査をした。
- 胆沢町役場の職員の協力で、調査に応じてくれるキーパーソンがいる事例集落を選んだことが調査成功の鍵であった。また、現在では不可能であるが、農家台帳を転写することができた。

3. 農業の維持形態に関する研究(3)

—岩手県胆沢扇状地の稲作農村を事例として—

- 2001年7月から8月にかけて本調査を行い、3つの事例集落において景観・土地利用、集落の起源と歴史、集落の営農組織、集落のコミュニティ活動、個々の世帯の就業構造、標準的な農業経営などについて、観察と聞き取りによって情報を収集した。これらを整理し、科学研究費の報告とした。
- さらに、胆沢扇状地の農業の維持形態が、どのような全国的な意味をもっているかを考えて、地学雑誌の論文と『散村・小都市群地域の動態と構造』（金田・藤井編）の原稿とした。

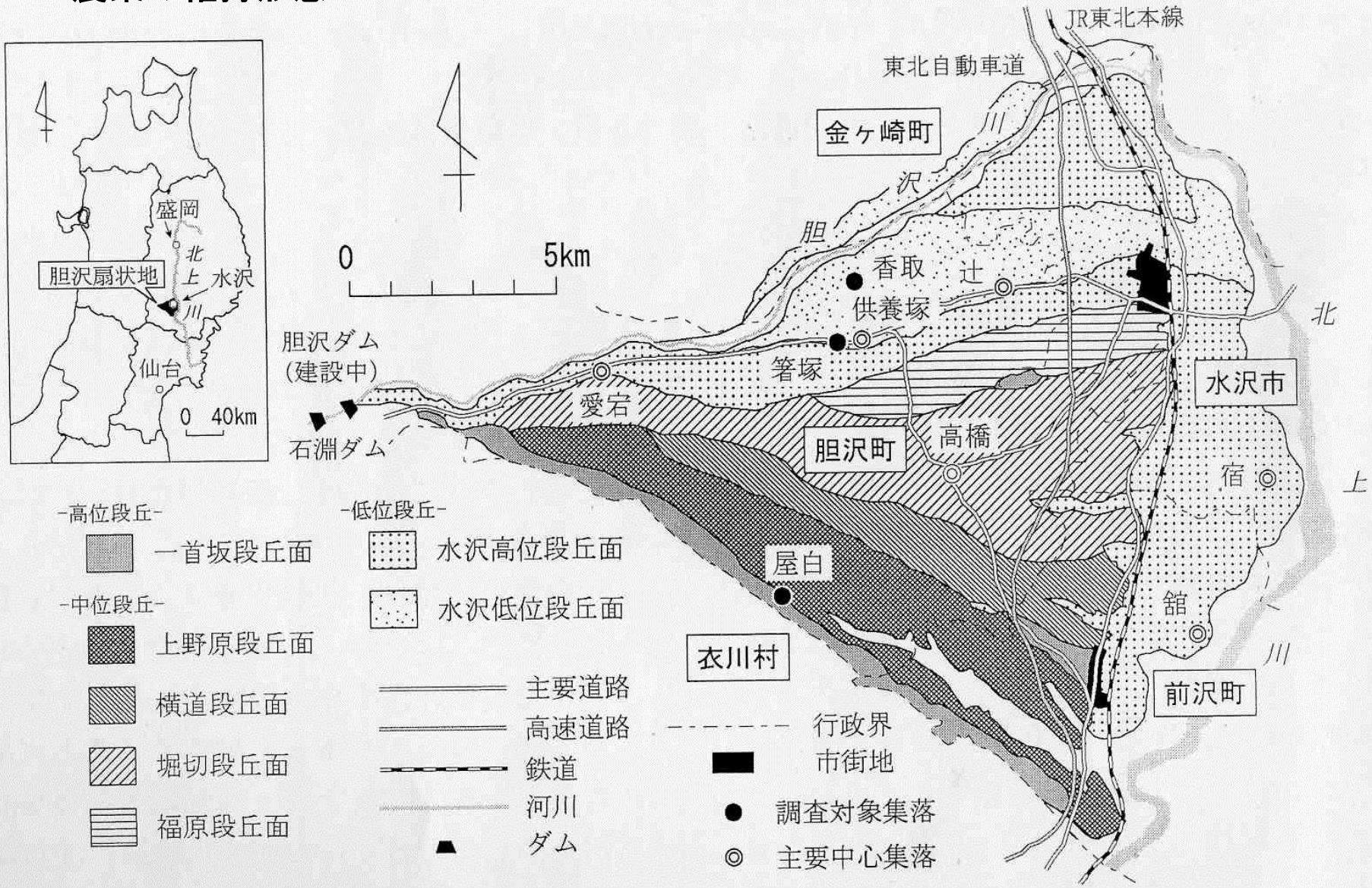
3. 農業の維持形態



胆沢扇状地の農村景観

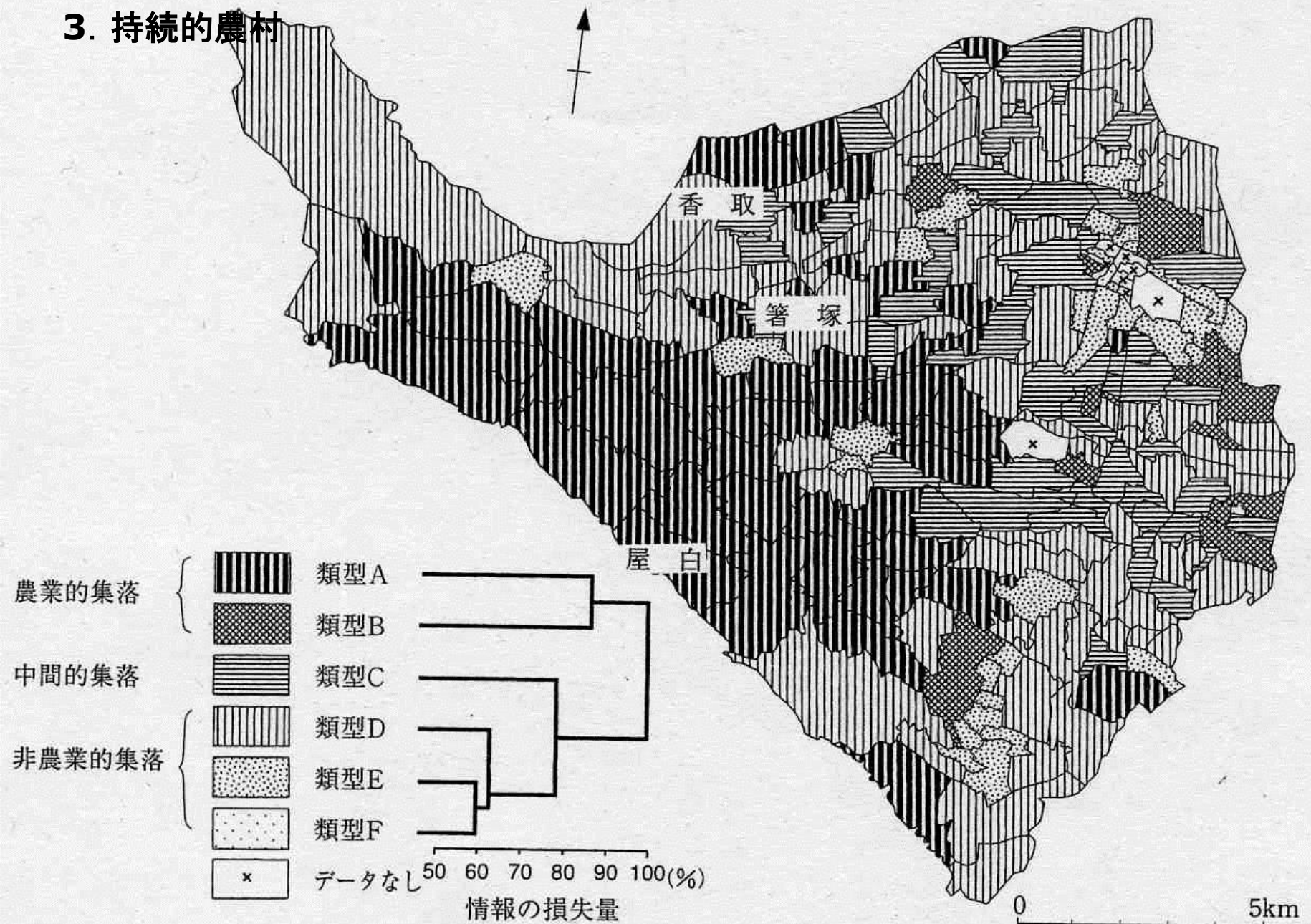
01 7 29

3. 農業の維持形態



胆沢扇状地の地形と事例集落の位置

3. 持続的農村



胆沢扇状地における農業集落の諸類型(1995年)

3. 農業の維持形態

調査対象	主	妻	父	母	備考	面積
① 会+長	主 ⁴³ (42) 水沢地区の職員 + 農家	妻 ⁴¹ 息子料理 (老人 + 一人、学教師)	父 ⁶⁹ 水稲 + ハウスU-2V	母 ⁶⁵ "	水稲 + 120-2V	2500 m ²
② 会+日+長	主 ⁴⁸ 運動屋 息子 + 農家	妻 ⁴⁷ パト + 長	父 ⁷⁰ 息子 + ハウスU-2V 稲	母 ⁶⁷ 息子 + "	自然光法車 (無肥料無農薬)	2500 m ² 水稲 + 120-2V
③ 息子(長)	主 ⁶³ 息子 5ha 息子 + 息子	妻 ⁶¹ 息子	息子 ⁴⁰ 兼営(計2) (水沢町) + 息子 + 息子	息子 ³⁶ "	ハウス + 2500m ² 120-2V	300 a ↓
④ 長+会	主 ⁸⁶ 息子 60a	妻 ⁸¹ 息子	息子 ⁴⁰ 兼営(計2) (水沢町) + 息子 + 息子	息子 ³⁶ "	水稲	4.6, 0.4, 5.0

3. 持続的農村

就業 類型	世帯 番号	性別年齢別世帯構成員												所有耕地										農業経営部門					農業維持 形態								
		18~29		30~39		40~49		50~59		60~69		70~		ha										水稻	野菜	花卉	タバコ	肉牛									
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10													
農業 主体	1												●													○							○	A			
	2					◎	◎						●														○							○	A		
	3				□	□					◎	◎															○	○							A		
	4	×	×			◎	◎						●	●													○								A		
	5				×								◎	◎													○								A		
	6														●												○								B		
	7					×							◎	◎													○								A		
農業 副次	8	×						□	□				●	●												○						○		A			
	9					□							◎													○									A		
	10					□	×						●	●												○	○								A		
	11					□	×						●	●												○	○								A		
	12					□	□						◎	◎												○	○								A		
	13					□	□							◎												○									A		
	14									□	◎				●											○									B		
	15					×	×							◎												○									A		
	16		×						□	◎				●	●											○									A		
	17								□					●	●											○										A	
非 農業	18	×						□	◎					●	●										○										A		
	19					□	□						◎													○										A	
	20				◎	×			□	□				●	◎											○										A	
	21					□	□																			○										B	
	22									□	◎															○										A	
	23					×	×	●			×	●														○										C	
	24							×																												C	
	25					×					×																										C

◎ 農業 × 農外就業 田
 ◎ 農業(主)+農外就業(副) ● 家事・無職 畑
 □ 農外就業(主)+農業(副) 30~39:年齢

A: 自家で維持
 B: 部分委託
 C: 全面委託もしくは作付放棄

胆沢町香取地区における世帯の就業構造(2001年8月)

3. 持続的農村

胆沢扇状地の事例集落における農業の維持形態

農業的集落

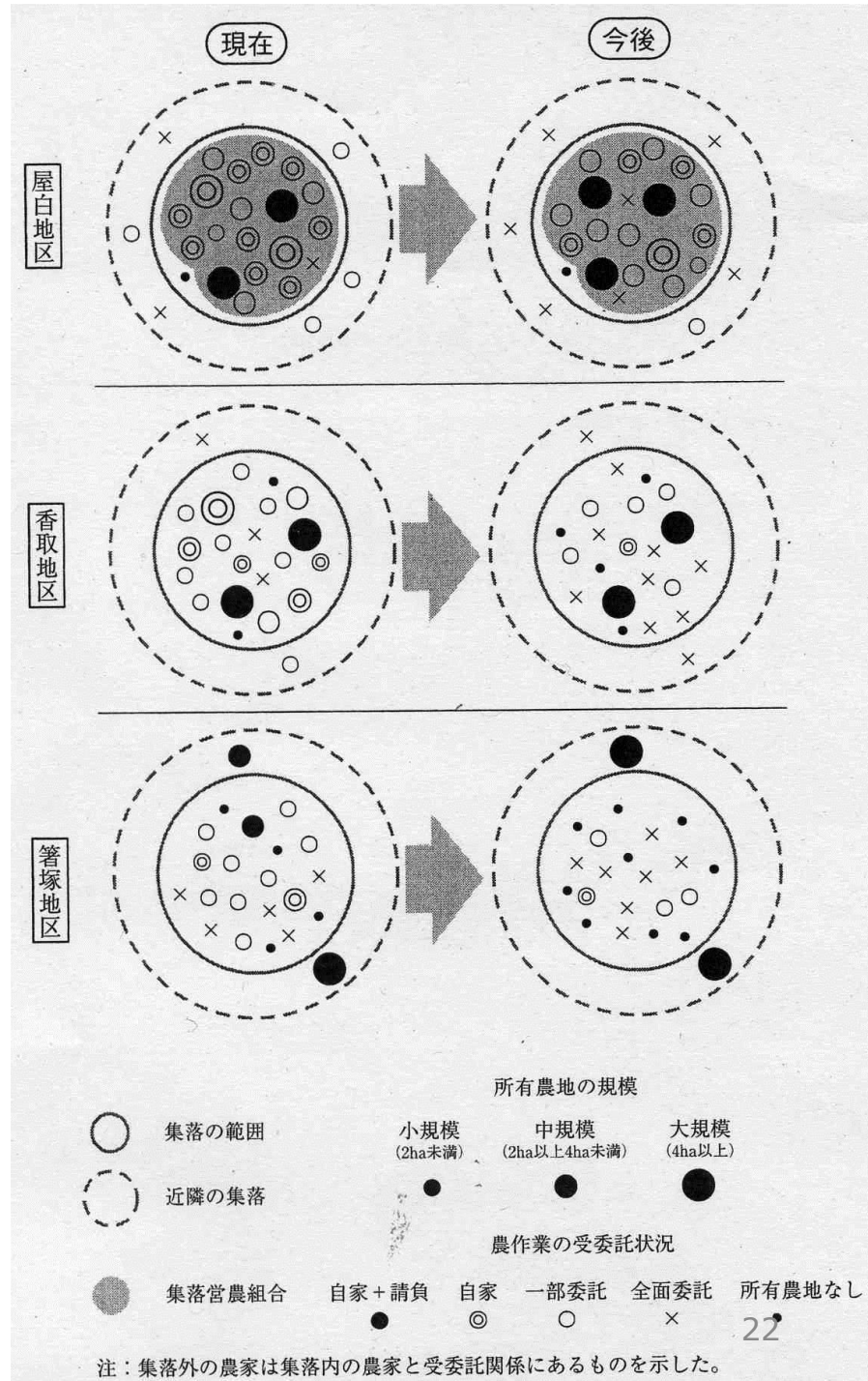
個別農家と集落営農によって農業を維持する。

中間的集落

集落内外の専門的農家に農作業を委託することによって農業を維持する。

非農業的集落

集落外の専門的農家や農業協同組合などに農作業のほとんどを委託し、実質的に農業を放棄する。

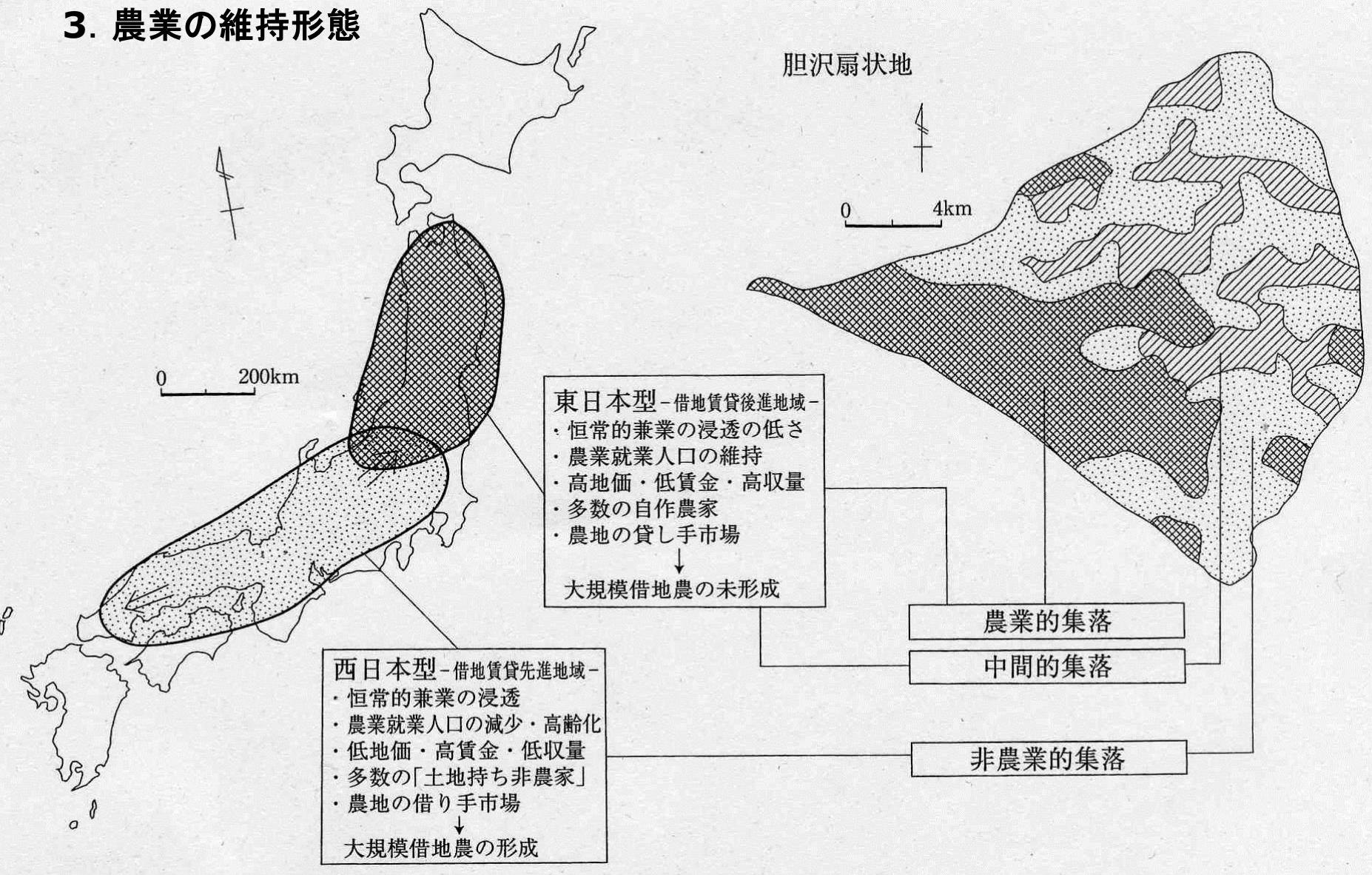


3. 農業の維持形態

農業の維持形態研究のさらなる展開

- 胆沢扇状地の農業の維持形態を、細山(2001)の研究を参考に全国的な意味づけを行った。
- 科学研究費補助金基盤研究(B)の「日本における農村地理学の構築の理論的・実証的研究」と「日本農業の担い手からみた農業維持システムの地域動態的研究」を得て、事例調査を蓄積するとともに、日本農業の維持形態を整理する。
- 茨城県の水戸市(2002)と総和町(2004)、筑西市(2008)、千葉県九十九里平野(2007)、新潟県高田平野(2008)、静岡県静岡市(2008)で調査をした。
- 研究成果公開促進費を得て単行本とした。

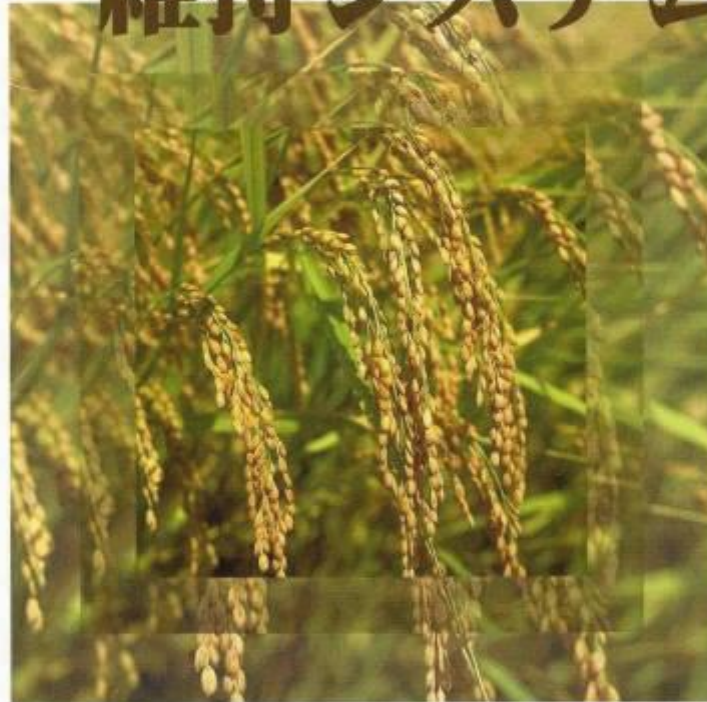
3. 農業の維持形態



胆沢扇状地における農業維持の意味

3. 農業の維持形態

日本農業の 維持システム



田林 明・菊地 俊夫・松井 圭介 編

農林統計出版

4. 農村空間の商品化に関する研究(1)

－栃木県那須地域を事例として－

- 日本やカナダの農村で調査を続けていると、現代の農村は農業生産やそのための土地利用・景観などで性格づけられる部分が少なくなり、その他の非農業的、非生産的要素が大きな意味をもつようになったことが感じられた。
- 高橋(1999)、立川(2005)、Cloke(1993)の論文などから、「農村空間の商品化」という視点の有用性に気づいた。
- 農業の維持形態という観点で調査していた石垣イチゴ栽培の調査結果を、農村空間の商品化という視点から解釈することにした。

4. 農村空間の商品化に関する研究(2)

－ 栃木県那須地域を事例として－

- 科学研究費補助金基盤研究(A)「商品化する日本の農村空間に関する人文地理学的研究」を得て、15人の共同研究を行った。
- 2004年に大学院修士課程の地理学野外実験で、調査した那須地域を、「農村空間の商品化」という視点から改めて研究することにした。
- 大学院生3人と、研究の枠組みをつくって、主要な被調査者アポイントメントをとって本調査にでかけた。
- この調査対象は、役所や博物館、観光協会、ホテルや観光施設、農産物直売所など事業所・団体が多く、比較的短時間で情報を収集することができた。

4. 農村空間の商品化に関する研究(3)

— 栃木県那須地域を事例として —

- 2008年8月に本調査を行った。塩原温泉、那須高原、那須扇状地における観光業の変遷と現状、観光停滞の打開策としての農村空間の商品化(田園空間博物館、農産物直売所、体験農場、観光牧場、農家レストランなど)、そして新しい観光地域の形成の可能性について調査した。
- 那須地域の調査結果をまとめるとともに、すでに調査してあった高田平野の観光振興や黒部川扇状地の地域振興の結果を、解釈しなおして論文にした。

那須地域の範囲



4 農村空間の商品化

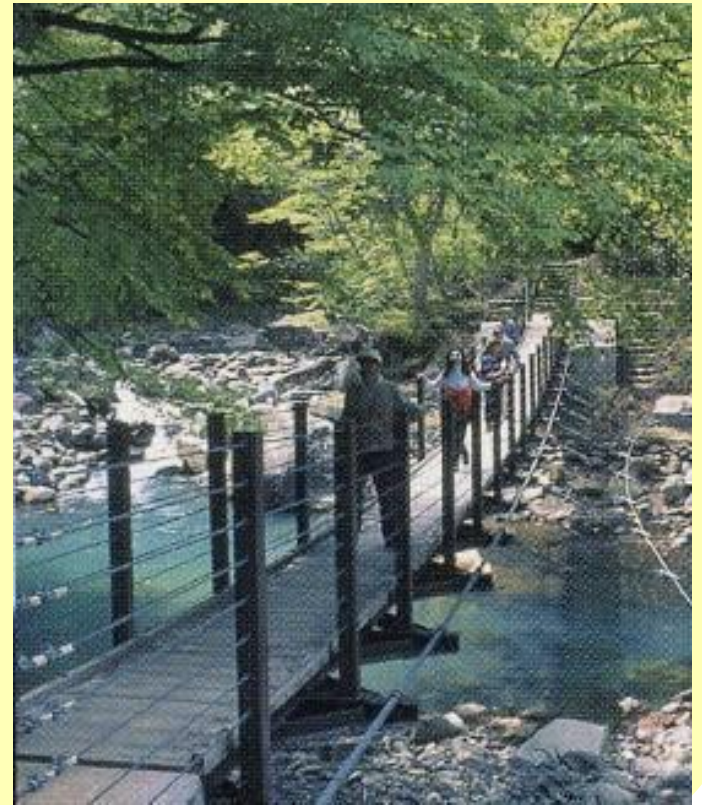
那須地域における観光地の変遷(時代区分)

時代区分	塩原温泉	那須高原	那須扇状地
温泉保養地の時代 (1950年代)	湯治客の受け入れ 個人長期滞在旅行 湯治場	温泉・別荘地の開発 個人長期滞在旅行 湯治場, 別荘地 登山, ハイキング	—
大衆温泉観光地の時代 (1960~1970年代後半)	団体慰安旅行者による発展 短期団体慰安旅行 温泉, スキー場	高原リゾートの開発 個人・団体旅行者 温泉, スキー場, 観光牧場 レジャー施設	—
最盛期 (1980~1990年代前半)	マスツーリズムへの対応 (旅館の増改築・大型化) 個人・団体旅行者 温泉, スキー場	高原イメージの活用 個人短期旅行 温泉, レジャー施設 ペンション, ホテル キャンプ場, 別荘,	千本松牧場(土産物, 農業体験, ゴルフ場)
再編期 (1990年代後半~)	自然・農村資源の再評価 団体客から個人客への転換 温泉, 足湯, 文人の足跡 自然散策路, 農産物直売所	農村資源の活用 個人短期旅行 美術館, 博物館, 別荘 温泉, レジャー施設 農業直売所, 農業体験	農業・農村資源の活用 日帰り個人客 田園空間博物館事業 農業直売所, 農業体験

4 農村空間の商品化

塩原温泉における農村空間の商品化と観光

自然観察路



アグリパル
塩原

4 農村空間の商品化

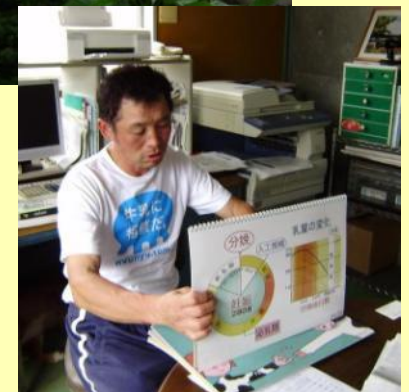
那須高原における農村空間の商品化と観光



ふれあいの郷直売所
(道の駅「那須高原友愛の森」内)



体験農業や搾乳実演など多様な取り組みを実施する酪農家



6. 農村空間の商品化: 那須地域

那須扇状地における農村空間の商品化と観光



↑ 旧取水口
(現, 那須疎水公園)

那須疎水の施設



↑ 頭首工



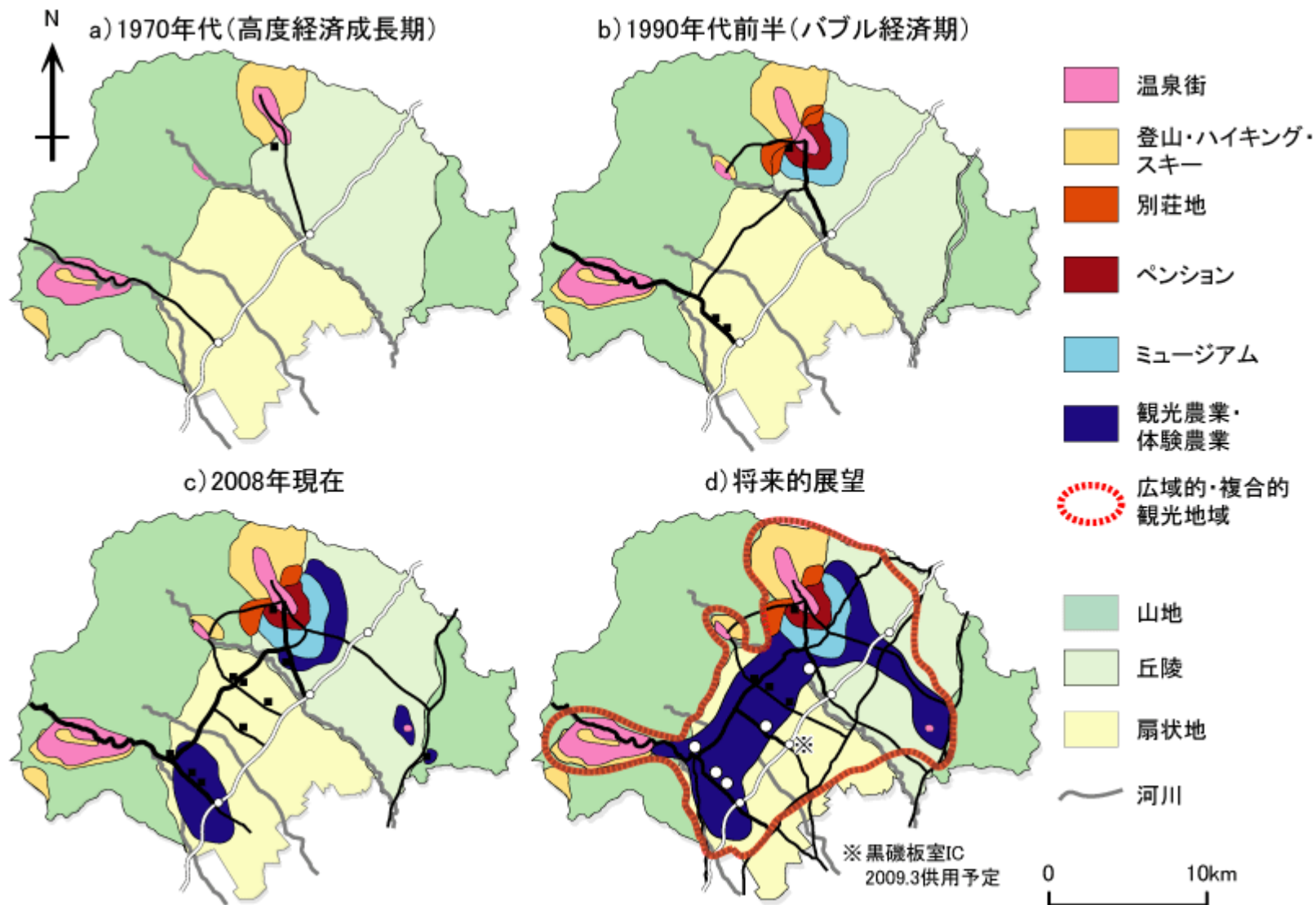
← 千本松牧場

那須野が原田園空間博物館事業



4 農村空間の商品化

那須地域における観光発展の概念図



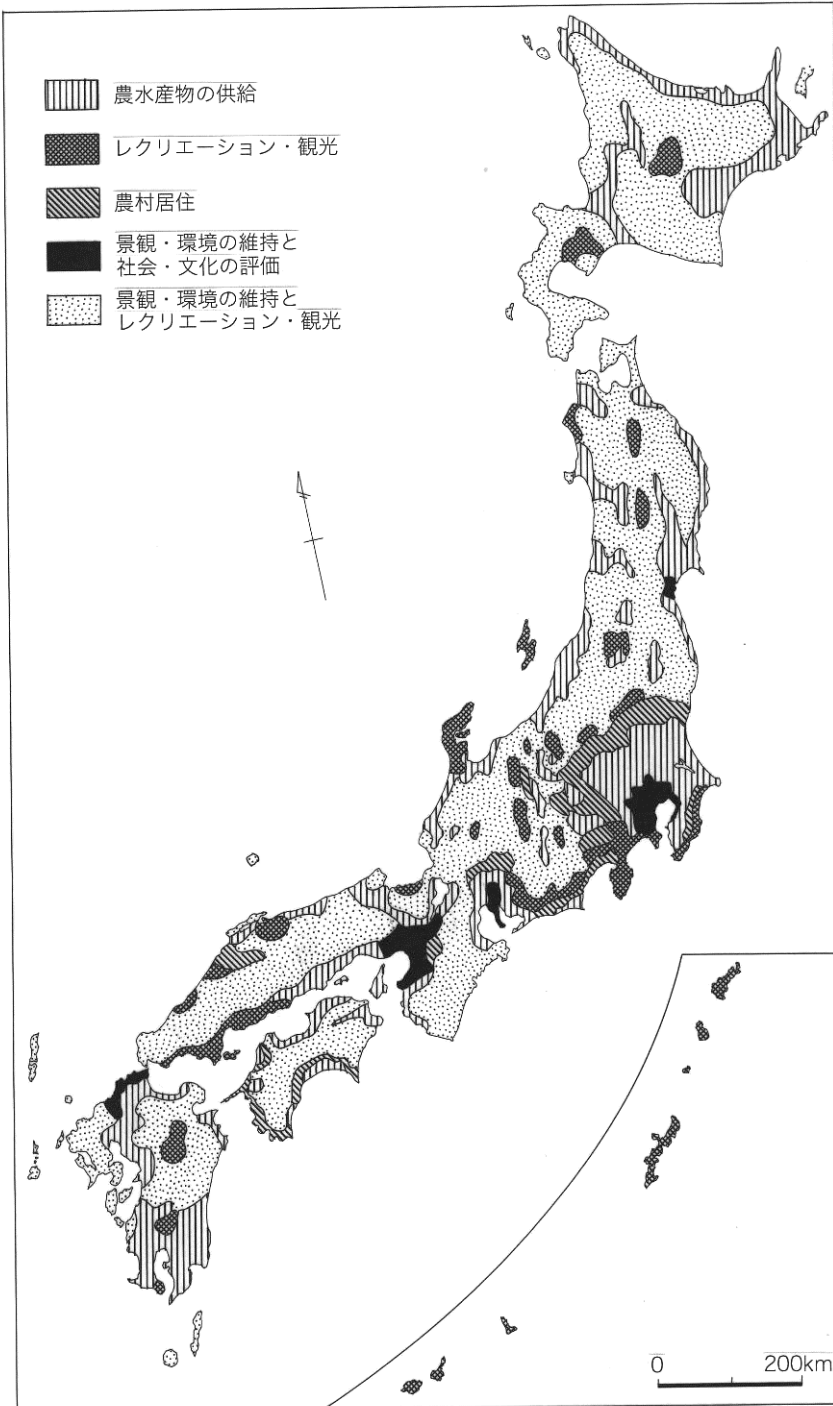
農村空間の商品化研究のさらなる展開

- 科学研究費補助金基盤研究(A)の共同研究によって、内外の事例研究を蓄積した。
- 農村空間の商品化の形態を類型化し、それに基づいて日本列島を地域区分した。
- 農村空間の商品化の背景となる地域的条件について整理した。
- 研究成果公開促進費を得て単行本にまとめた。
- さらに科学研究費補助金基盤研究(C)「農村空間の商品化からみた日本の余暇・観光振興の地域差に関する実証的研究」に取り組んだ。

6. 農村空間の商品化:地域差

日本における農村空間の商品化の地域差

1. 農水産物の供給
2. レクリエーション・観光
3. 農村居住
4. 景観・環境の維持と社会・文化の評価



4 農村空間の商品化



商品化する 日本の農村空間

田林 明 編著

農林統計出版

4 農村空間の商品化

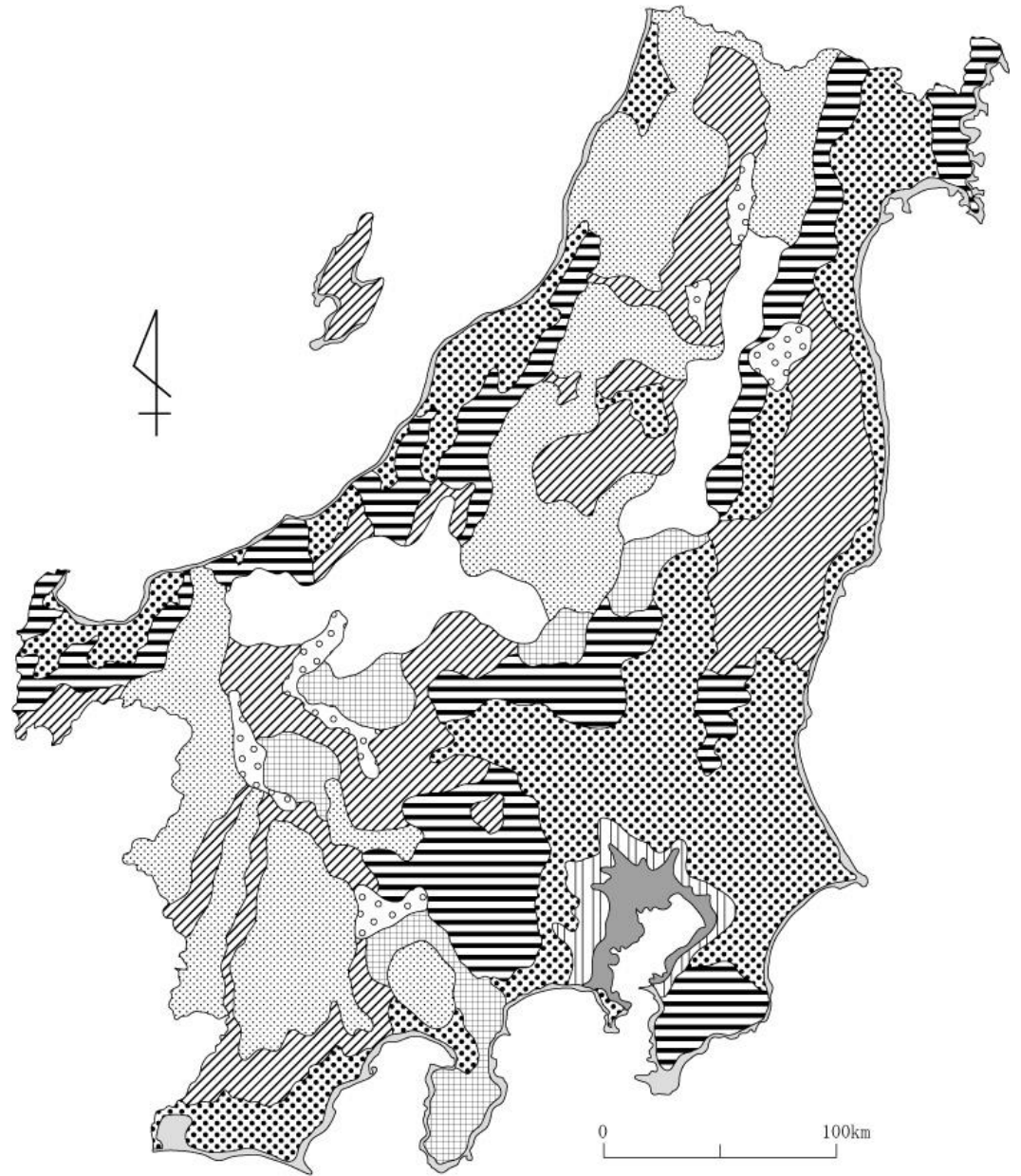
農村空間の商品化による観光活動の分類

	低地				山地	近郊丘陵地・ 低山性山地	高原・ 火山山麓	山地		沿岸地域 ・島嶼部
	都市地域	郊外地域	平坦農業 地域	盆地農業 地域				積雪山地	高山	
散策	◎	○	○	○	○	○	○			
ハイキング				○		◎	○			
サイクリング			○			○	○			
避暑活動							◎			
スキー								◎		
登山・トレッキング									◎	
マリンスポーツ										◎
市民農園		◎								
クラインガルテン			○							
農産物直売所		○	◎	○		○				○
観光農園		○	○	◎						
食の提供			○	○	○		○			○
農林漁業・生活体験			○	○	◎			○		
農漁家民宿				○	○			○		○

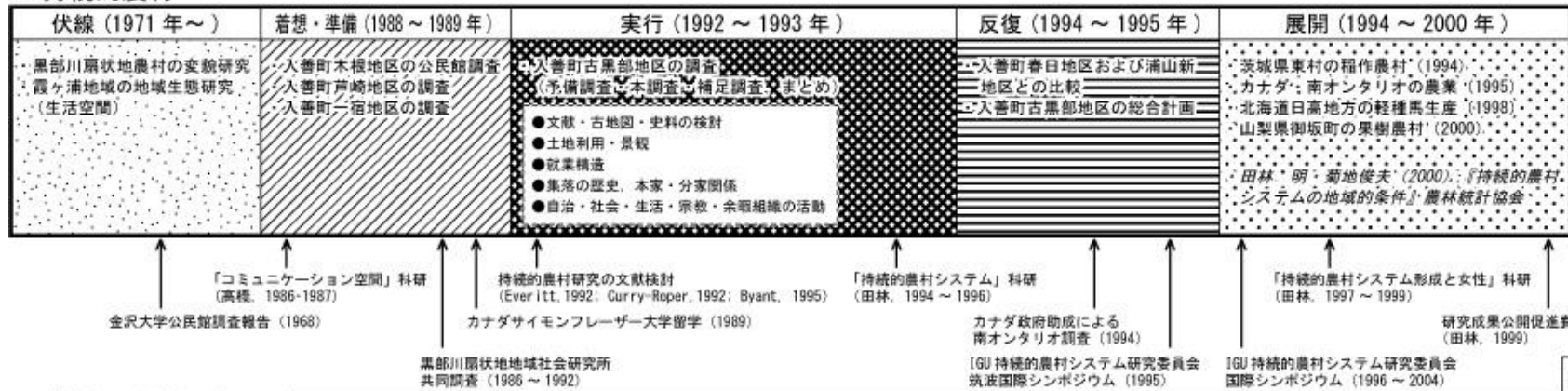
4 農村空間の商品化

農村空間の商品化 による観光振興から みた首都圏とその 周辺の地域差

- ・地形や積雪状況、水辺空間といった自然条件
- ・農林水産業の状態
- ・既存の観光地の存在
- ・都市からの近接性や交通利便性

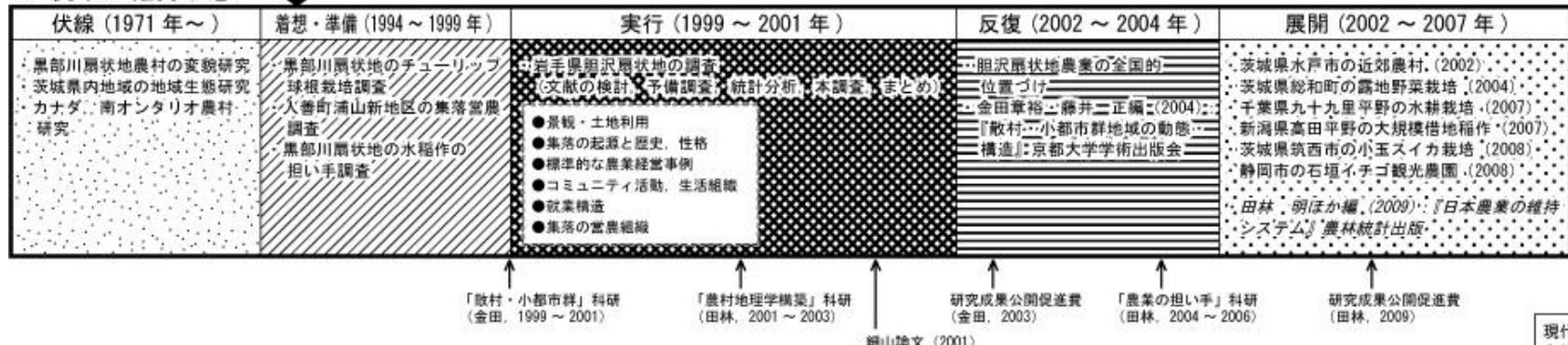


a. 持続的農村



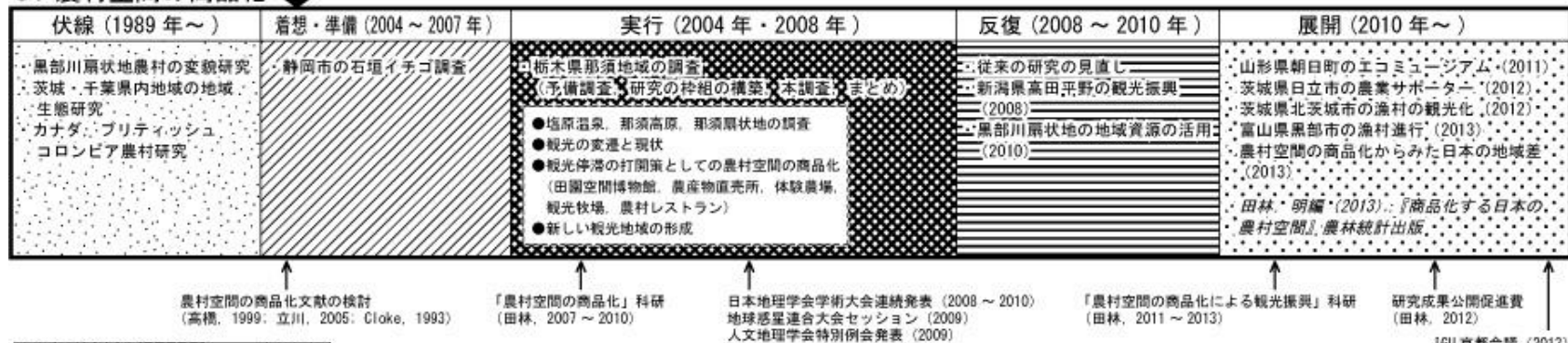
持続的農村の基盤
としての農業維持

b. 農業の維持形態



現代の農村に含まれる
多様な要素の解釈

c. 農村空間の商品化



新しい課題?



農業・農村地理学におけるフィールドワークを重視した研究の手順と方法

5. フィールドワークを重視した農業・農村地理学研究の手順と方法(1)

- 筆者が実施してきた1980年代から現在までの間の3つの研究課題に関する調査・研究の体験を通して、どのような手順と方法で研究を進めてきたかを説明した。
- 3つの研究課題のいずれもが、「伏線」と「着想・準備」、「実行」、「反復」、「展開」という5つの段階をたどった。
- 1つの研究課題を追求している過程で、次の研究課題の着想・準備に至ることが多い。研究課題は各時代における農業・農村地域の様相や社会・経済的課題に対応して、変化してきている。
- 研究を始めたり継続する契機や動機は、文献の検討や学会での議論に触発されたことがあるが、意図しないで他人にさそわれたことがきっかけとなることも多い。

5. フィールドワークを重視した農業・農村 地理学研究の手順と方法(2)

- 一旦研究を始めると重要な役割を果たすのが、科学研究費など研究費の確保である
- 博士課程の大学院教育で効果的な方法の1つは、学生自身の博士論文研究を綿密に指導するほかに、教員の研究テーマの調査に学生を参加させ(過剰な負担にならないようにして)、教員の研究姿勢を見せることである。
- 調査・研究を学会誌や紀要等の論文として発表し蓄積して、最終的には単行本として社会に還元することが研究・調査の持続には不可欠である。
- いずれにしろ、一連の研究を持続・発展させるためにはフィールドワークが重要な役割を果たす。